

令和4年度 第2回下野市小中一貫教育推進協議会 議事録

審議会等名 令和4年度 第2回下野市小中一貫教育推進協議会
日 時 令和5年3月8日(水) 午後3時00分～午後4時50分
会 場 下野市役所 教育委員会室
出席者 海老原忠 委員、田澤孝一 委員、設樂孝男 委員、人見佳代子 委員、
松本文男 委員、服部由佳 委員、小島恒夫 委員、宮崎真人 委員、
伊沢幸子 委員、大塚洋子 委員、小野瀬善行 委員、平石勝美 委員
【欠席委員】瀬端徹 委員、菅井貞雄 委員、渡邊欣宥 委員

市側出席者 石崎雅也 教育長
(事務局) 石島直 学校教育課長、稲葉亜希恵同課課長補佐兼指導主事、
森口哲二 同課主幹兼課長補佐、土田礼巳 同課指導主事、
松川博美 同課指導主事、上野保久 同課小中一貫教育統括コーディネーター

公開・非公開別 公開 ・ 一部公開 ・ 非公開

傍聴人 0人

議事録(概要) 作成年月日 令和5年3月9日

1. 開会(石島課長)

2. 会長あいさつ(小野瀬会長)

皆さんこんにちは。年度末の忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。開催に先立ちまして、ごあいさつ申し上げます。

第2回の会議は、コロナの影響もあり、書面開催という形で久しく行われておりました。久方ぶりに、対面で行うことができうれしく思います。コロナ禍がひとつの転機を迎える中で、子どもたちの学びもどのように変わっていくのか、どのように変えていくべきなのか、そしてここ2～3年の影響がどのように出るのかということが、注視されると思っております。先生方のご協力をいただきながら、状況を共有し、大切なことは議論していこうと思っております。これが1点目です。

2点目としては、瀬端委員が本日本日お休みということで残念なのですが、石橋高等学校の甲子園出場、おめでとうございます。地域の学校が甲子園に出るということは、地域の児童生徒にとってもたいへん励みになり、誇りに思うのではないかと思います。そういう意味でも、下野市は、スポーツを通じて、また、いろいろな体験を通じて繋がれる、そういうポテンシャルをもった地域なのだなと感じました。改めまして、お祝い申し上げます。

3点目は、つい先日、下野新聞の1面に、宇都宮大学のことが大きく出てしまいました。詳細は報道の通りです。私自身教育活動をしている立場で申しますと、子どもたちは「授業を通して成長したい」、教師は「授業を通してこのような力を身に付けて欲しい」という、ある意味契約というか、関係性の中で成立するものであらうと改めて考えたところです。授業、学校教育については、子どもたち、先生方、地域、我々のような

関係者の思いを大切に議論されてきました。この会議においても、そのようなことを、確認する場ではなかったかと思います。今年度最後の会議にはなりますが、委員の皆様から、様々なご意見をいただきながら進めて参りたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

3 議事

(1) 各中学校区における取組について

(小野瀬会長) 議事に入ります。まず、「小中一貫教育推進」について事務局から総括的な説明をお願いします。

(土田指導主事) [資料：下野市小中一貫教育推進ハンドブックをもとに本年度の総括的な推進状況を説明]

(小野瀬会長) ただ今の説明について、ご質問等ありましたらお願いいたします。
(質問なし)

それでは、各中学校区における取組について、各中学校区の代表の校長先生方、名簿の順にご説明をお願いします。

(海老原委員) [南河内小中学校の取組について説明]

(田澤委員) [南河内第二中学校区の取組について説明]

(設楽委員) [石橋中学校区の取組について説明]

(人見委員) [国分寺中学校区の取組について説明]

(小野瀬会長) 説明ありがとうございました。各中学校区の今年度の取組や全体構想などについて、忌憚のないご意見ををお願いします。

(伊沢委員) 授業において、全体の流れについて行けない子どもがいると思いますが、ついて行けない子供をどうやってついて行けるようにしていくかを考えて欲しいと思います。せっかく小中一貫教育をやっているのですから、中学生が小学生に教えることがあったらよいと思います。

あいさつ運動は、家の中でもやれるとよいと思います。親子の交流にも役立ちますので、家庭内での親子のあいさつを、保護者に是非勧めて欲しいと思います。

子供会育成会と市民会議主催で、「子ども何でも発表会」を3年ぶりに開催することができました。発表の中で、模造紙を使ったものなどの作品は昨年12月18日から冬休み期間中にかけて市庁舎ロビーに展示しました。チラシを全児童分準備した割には、応募が少なかったと思います。将来は中学生・高校生にまで広げていきたいと考えていますので、学校でももっと啓発活動に協力して欲しいと思います。

(平石委員) 南河内小中学校について質問があります。

1つ目は、大勢の職員をまとめるために、校長が苦勞したこと。

2つ目は、児童の様子で、よくなったこと。

3つ目は、義務教育学校になって、保護者の反応について教えてください。

(海老原委員) 本校は全職員を合わせますと78人います。義務教育学校経験者は1人です。中学校の動きと小学校の動き、また、教職員の指導の視点が違います。ルールで言えば、中学校は厳しく、小学校はやや甘い面があります。

そういう発達段階を理解しながら、「子どもをよく見ましょう」「教職員が互いに話をしましょう」と呼び掛けてきました。特に、学校の教育活動において、行事のすり合わせには苦労しました。また、義務教育学校設立にあたり、コミュニケーションをとるために職員室をひとつにさせていただきました。そのことによって、職員間の会話が増えたと思います。そして、意識も一つになってきたと思います。

児童は、当初新しい学校で頑張ろうという意気込みが見られ、その分、妙に硬さもありました。慣れるに従って、通常の落ち着いた生活にもどってきました。下級生は、間近に見る上級生に憧れています。交流活動などで上級生に面倒を見てもらおうと「御礼の手紙」が上級生に届き、その手紙が上級生を喜ばせたりしました。縦割り班活動では、どうしても上級生が我慢しなければならない場面が出てきます。下級生に合わせて活動しなければならない場面が多くなるからです。その面は、上級生だけの活動を作ったりして達成感を味わう工夫をしました。担任もよくフォローしてくれました。

小規模校からの保護者は、クラス替えが楽しみと言っていました。体育祭では、午前前期課程児童が、少し交流を入れて、午後後期課程生徒が行うというスケジュールでしたが、時間が制限されて、今までよりも出番が少なくなりました。義務教育学校になった良さを感じないという意見も聞かれました。現在は、次年度に向けて改善策を練っているところです。

今後の重要な課題としては、小中学校が一緒になったメリットを活かして、学力を向上させていくことです。

(平石委員)

海老原委員は、小学校と中学校の経験があるので、義務教育学校の校長として、その経験を活かしてリーダーシップを取っていただきたいと思います。

(小野瀬会長)

具体的なお話が伺えたと思います。他の方がいかがでしょうか。

(小島委員)

石橋中学校の学校運営協議会委員を3年ほど務めさせてもらいましたが、「家読」が伸びないのは、大人が家の中で学ばないせいではないかと思えます。せっかく学校でいいアイデアをもって読書指導を実施してきたのに、家庭では伸ばせない。子どもも、主体的に学んでいる子どもが少なくなっている印象があります。学校、地域が一緒になって学ばないといけないのではないかと思います。市全体として、生涯教育について考え改善していくべきかと思えます。

各中学校区の説明には、先生方の働き方改革についての話がありませんでした。どのように改革がなされたのか、そこで生まれた「ゆとり」がどのように子どもに還元されたのかということも説明の中にあってもよかったと思いました。

(小野瀬会長)

小中一貫教育を推進することが眼目にあると思うのですが、小島委員がおっしゃるように、地域と一緒にやることで「ゆとり」が生まれたら、働き方改革につなげるということも大事な案件になると思います。授業等における小中一貫教育が整ってきて、これは手段であって、目的は子ども

たちの学力が向上することであると思いますが、往々にしてそういうものを揃えてしまうと、視野が狭くなってしまうこともあるのではないかと思います。伊沢委員、小島委員が述べられたような、様々な学びの在り方を小中一貫教育と接合していくかということが、見えてきたと思います。地域の大人が学びの楽しさを教える場をもつということも、大切な視点であると思いました。

(服部委員)

資料を見ながら説明を聞いて、各中学校区ともやり過ぎと思うくらいの日々の取組であると思いました。目指すところは同じで、子どもが幸せに学び、健康に健やかに育っていくことを目指していると思いますが、各中学校区ともそれぞれに良い取組をしているので、若干地域性が違うところはあるにせよ、良いところを共有して、それを実践していけばいいのではないかと思います。

小学校では普通にできていた子が、中学校に行ったらかなり低迷したという場合があります。小中一貫教育の中で、どこでそうなったのかを検証しフォローアップが必要であると思います。小中のギャップをなくすための取組ではあると思いますが、学校の負担が大き過ぎると感じます。学校の負担を軽くする方法として、各校の取組の情報交換をして、良い取組はモデルケースとして参考にするとか、学校だけで行うのではなく、地域に投げかけ、地域と連携していくとかということを進めていけばいいのではないかと思います。

(小野瀬会長)

ありがとうございます。各中学校区からご説明いただいた上でご意見をいただきました。その他ありますか。

(2) その他

(小野瀬会長)

それでは、その他ですが、この場で審議したい内容をお持ちの方はいらっしゃいますか。事務局からございますか。

(土田指導主事)

〔令和4年度 下野市小中一貫教育 教職員対象調査(市全体)について説明〕

(小野瀬会長)

小中一貫教育に関するアンケートということで説明をしていただきました。この調査につきまして委員の皆様からご意見がありましたらお願いします。

(伊沢委員)

保護者や地域の人にも学校に入ってもらおうとよいと思います。自分も学校に点字指導に行ったことがあります。地域にはそれぞれ得意なもの、学校と関わるものがある人もいると思うので、学校から地域の人に関わってくれるように声掛けをしていくとよいと思います。

(小野瀬会長)

まさに学校運営協議会のあるべき姿ですね。小中一貫教育を推し進めていくためにも重要なご指摘であったと思います。

(松本委員)

地域が学校へ入るシステム、つまり、生涯学習ボランティアや学校支援ボランティアが入っていけるシステムがあればよいと思います。現在も総合的な学習の時間で地域人材を取り入れての学習が行われていますが、もっと広く募っていけるとよいと思っています。学校には年間指導計画があり、途中から組み込むのは難しいとは思いますが、学校は、「地域と

の連携」ということを重要視して欲しいと思います。私自身もボランティアとしてzoomを通して音楽活動を行っていますが、ボランティア自身も成長できる部分もあります。課題はありますが、地域のエキスパートを学校に入れるシステムが欲しいです。

(小野瀬会長) 小中一貫教育を見通して、教育活動が実施されるところに、なかなか学校教育に取り入れが難しい音楽や芸術とか分野を地域の人の力を借りて取り入れるという貴重なご意見でした。

(宮崎委員) 義務教育学校の保護者として申し上げれば、グラフ(9)の「小中一貫教育への理解」については、保護者の感覚からすると、理解の度合いがもう少し低いと思います。一貫教育なのか一貫校なのかなど、よくわからない保護者もいるので、間にいる立場の人間であるPTA役員がもっと啓発に動かなければならないと思いました。また、大人の学びが少ないというご指摘もありましたので、少しでも、自分の身の回りの教育環境改善に協力していかねばならないとも思いました。

(大塚委員) 「中1ギャップ」に対応する方策の説明がありましたが、幼児教育の現場にも、「小1の段差」というものがあります。幼児教育の現場では「架け橋プログラム」といって、その段差をなくす教育に取り組んでいるところです。幼→小→中→高→大と、段差は必ず出てきます。私たちは、キーワードを「つながり」として幼児教育に取り組んでいます。生まれてきた子どもを小学校につなげるために、どうやってその段差を埋めるために子どもたちを成長させていくかということです。ただ今の先生方の事例として、「握力」を上げるための方策についてありましたが、非常に興味深かったです。それは、その場で構築されるものではなくて、私たち幼児教育の現場の者が、遊びの中で体力を付けていかななくてはならないのではないか、その十分な体力を付けて小学校につないでいく、送り出していくというところが課題になっていくのではないかと感じました。会議の冒頭で小野瀬会長の話にあった宇都宮大学の問題について伺い、保育の現場でも、保育士と子どもたち、保育士と保護者、そして職員間との関係でいい保育にもなるし、崩れるということにもなるので、現場で、人と人とのつながりというものを大切にしようと思いました。今日の話や感じたことを、現場に戻って教職員と話してみたいと思います。

(小野瀬会長) ありがとうございました。

本日の議事の内容は以上になります。活発なご協議、ご協力ありがとうございました。